

## 「サバルタン」研究 -概念的な特性と意義-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧, 杏奈 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21746">http://hdl.handle.net/10291/21746</a>

《院生応募論文（2020年度）》

## 「サバルタン」研究 ——概念的な特性と意義——

牧 杏 奈\*

### A Study on ‘Subaltern’: Its Conceptual Characteristics and Significance

Anna MAKI

#### はじめに

「サバルタン」(subaltern)という言葉は、人文社会科学の領野で「従属的な立場にある個人や集団」を示す学術的な専門用語として使われている。元来は、「大尉の下の位の将校を指す軍事用語」であり、形容詞としては「下位の」(of inferior rank)という意味を持つ<sup>1</sup>。日本語に訳される際は、「従属的社会集団」(= subaltern social group)や「下層民衆」(=subaltern people)といった表現が用いられてきた<sup>2</sup>。しかし今日においては、「サバルタン」とカタカナで表記されることが一般的であり、「従属(⇔支配)」「被抑圧(⇔抑圧)」「周辺・周縁(⇔中心)」といった概念と結びつけられて理解されている。

元々は軍事用語であった「サバルタン」を学術用語に転用したのはイタリアのマルクス主義者であるアントニオ・グラムシであった。そして、グラムシのサバルタン研究から着想を得たインドの歴史学者ラナジット・グハによる南アジア近代史研究プロジェクトへの移植と、ジャック・デリダの『グラマトロジーについて』の英訳者として知られるガヤトリ・C・スピヴァクによる「サバルタンは語るができない」という命題<sup>3</sup>が、「サバルタン」をポストコロニアリズム及びフェミニズムからの関心と批判に開かれた学際的な鍵概念の位置に押しあげた。

1 アーニャ・ルーンバ(吉原ゆかり訳)『ポストコロニアル理論入門』松柏社、2001年、75頁。ビル・アッシュクロフト、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン(木村公一編訳)『ポストコロニアル事典』南雲堂、2014年、248頁。

2 片桐薫「グラムシのサバルタン概念(従属)と今日のサバルタン問題」『アソシエ』第3号、2000年、271頁。

3 ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク(上村忠男訳)『サバルタンは語るができるか』みすず書房、2016年(1998年初版)、116頁。

\*博士後期課程政治経済学研究科政治学専攻

『ポストコロニアル理論入門』（*Colonialism/Postcolonialism*）の「サバルタンは語るることができるか？」という節で、著者のアーニャ・ルーンバは次のように問題を提起している<sup>4</sup>。

植民地権力は、まんまと被植民者を沈黙させたのか？植民地支配権力の破壊的な力を強調するとき、私たちは被植民者を、口答えさえできないほどの無力な犠牲者の位置に置いていることになってしまうのだろうか？逆に、植民地支配を受ける主体は「語る」ことができ、植民地支配権力に疑問を突きつけることができるのだと言うとき、私たちはそのような抵抗を行う主体をロマンティックに美化して、植民地支配の暴力を軽く扱ってしまっているのだろうか？（中略）そして最後に、サバルタンの声を知識人は代弁できるのか？

ルーンバはこうした問いが「ポストコロニアル研究の中心問題」であるだけでなく、より古くから、マルクス主義者やフェミニスト、そして自由主義的な歴史家さえもが「踏みにじられた者の視点を分節化したいという欲望」のもとで「抑圧を受ける人々の声を大きく響かせようとしてきた」と述べている<sup>5</sup>。そして、さらに次のように問うている。「サバルタンに語らせることは客観的にいって可能なのか？それとも私たち自身の関心事を、サバルタンに腹話術で語らせようとしているだけなのか？」と<sup>6</sup>。

ルーンバが提示したポストコロニアリズムの問題認識においては、サバルタンを「口答えさえできない無力な犠牲者」と見なすことへの疑問と同時に、サバルタンを「語る」ことができる「抵抗を行う主体」と見なすことへの躊躇いも現れている。結局のところ、サバルタンを究極的な弱者とすることも、主体的な抵抗者とする 것도、どちらもサバルタンを研究する研究者の「関心事」に基づく恣意的な規定行為となってしまう。そのため、こうした研究においてサバルタンとして規定された人々は、サバルタンとして規定されたその時点で言説上の主体性を剥奪されているのだということができる。

そうだとすると、「サバルタン」という言葉自体、研究者の意図と強く結びついた操作的な概念であり、サバルタン研究——サバルタンを主題とする研究——は、従属的な立場に置かれた人々の声を聞き取って復元しようと努力するものであっても、むしろ人々をサバルタンの位置に押し込めて声を奪い取ってしまう。つまり、社会のなかで従属的な立場に置かれた人々は、サバルタン研究の研究対象とされ、弱者あるいは抵抗者として描かれることによって客体化されてしまい、言説の領域においても従属的な立場に置かれることになるのである。

では、「サバルタン」という言葉を人文社会科学の領野において用いることには、人々をより従属的な立場に置く危険性しかなく、何の意義もないということになるのだろうか。本稿は、「サバルタン」

4 前掲『ポストコロニアル理論入門』278頁。

5 同上、278-279頁。

6 同上、291頁。

の概念的な特性を明らかにすることにより、その独自性と意義について検討を加える。冒頭で記したとおり、「サバルタン」は「従属的な立場にある個人や集団」を示す術語であるのだが、それを実体的な存在として捉えようとすると、サバルタンの規定行為に陥らざるをえない。そうではなく、「従属」という性質に根差した二次的かつ示差的な概念として把握することで、その独自性と意義がもたらされると考えられる。

従来、「サバルタン」概念を理解しようとする試みは、歴史的な関心あるいはポストモダニズム的な関心の二つの観点からなされてきた。前者においては、サバルタン研究は一種の「下からの歴史」として理解され、スピヴァクによる批判を契機に歴史研究から言説研究へとシフトしたことが指摘されている<sup>7</sup>。後者においては、スピヴァクに焦点を当て、その著作である『サバルタンは語るができるか』で論じられている「サバルタン」概念を理解しようという試みがなされている<sup>8</sup>。本稿においては、サバルタン研究の時代的、地理的、方法論的变化に伴う「サバルタン」の変質よりも、グラムシから今日のサバルタン研究までをも通底する「サバルタン」の概念的な特性に着目する。

本稿は、グラムシ（第1章）、グハ（第2章）、スピヴァク（第3章）、そして今日的なサバルタン研究（第4章）における「サバルタン」概念を検討し、最後に「サバルタン」の概念的な特性とその意義について論じる。「サバルタン」の内実が可変的であるが故に、研究者によるサバルタンの規定行為が生じうるが、一方で、人々がサバルタンたらしめられる構造上の問題を示すことも可能になる。この点において「サバルタン」という言葉の独自性及び意義があることを指摘したい。

## 第1章 グラムシの発明

「サバルタン」を軍사용語から学術用語へと転用したのは、イタリアのマルクス主義者として知られるアントニオ・グラムシであった。ファシズム当局によって逮捕・拘禁されたグラムシは、1929年に執筆許可を得た後、獄中生活のなかで全33冊にも及ぶ『獄中ノート』を執筆した<sup>9</sup>。そのうちの第25ノートが、「歴史の周辺にて（サバルタン社会集団の歴史）」（‘Ai margini della storia (Storia dei gruppi sociali subalterni)’）と題された、通称「サバルタン・ノート」である。これは1934年に書かれたもので、8つの草稿から構成されており、ヘゲモニー論や知識人論といったグラムシ思想における主要な各論題を横断する「基軸的なテーマ」であるサバルタン論が展開されている<sup>10</sup>。

グラムシの「サバルタン」概念は長きに亘ってその重要性を看過されてきたが<sup>11</sup>、アメリカの政治

7 粟屋利江「『サバルタン研究』再考——インド近代へのまなざし——」『創文』第376号、1996年、18-21頁。

8 『現代思想』第27巻、第8号、1999年では、「サバルタンとは誰か」と題したスピヴァク特集号が組まれている。

9 グラムシは、リソルジメント（国家統一運動）によるイタリア王国の誕生から30年を経た1891年、サルディーニア島に生まれる。国家統一後も、南部・島嶼部における貧困や北部からの差別といった深刻な問題が残存しており、そうした社会経済的な問題を体感するなかで社会主義運動へと傾倒し、ファシズムの台頭に対抗する「統一戦線」の形成を実現するための理論的・実践的探究を行った。詳しくは、松田博『グラムシ思想の探究 ヘゲモニー・陣地戦・サバルタン』新泉社、2007年、16-18頁。

10 同上、120頁。

学者で国際グラムシ協会（International Gramsci Society）の幹事を務めるマーカス・E・グリーンは、「プロレタリアート」とは異なる独自概念としての「サバルタン」について考察している<sup>12</sup>。また、『獄中ノート』（「校訂版」）の邦訳者である松田博は、「ヘゲモニー論」を欠いた「サバルタン論」も、またその逆もいずれも一面的なものにならざるをえない」とし、グラムシ研究におけるサバルタン論の「本格的探究」の必要性を指摘している<sup>13</sup>。以下では、これらの先行研究に基づき、グラムシの「サバルタン」概念の検討を試みる。

「歴史の周辺にて（サバルタン社会集団の歴史）」という題名からもわかるとおり、グラムシのサバルタン研究は歴史研究として展開され、古代ローマ時代、中世コムーネ時代<sup>14</sup>、そしてリソルジメント時代<sup>15</sup>におけるサバルタン諸集団による反乱や運動の比較分析がなされている<sup>16</sup>。第1草稿でリソルジメント時代のダヴィデ・ラザレッティによる千年王国運動を、第4草稿で古代ローマにおけるスパルタクスの乱（第6草稿でも主題となっている）及び中世コムーネにおけるチョンピの乱を、そして第5草稿で再びリソルジメント時代における革新的諸勢力による運動を取りあげたグラムシは、これらの論考において、宗教的マイノリティ、奴隷、中世コムーネの民衆（popolani）、支配的諸集団とは人種の異なる人々、プロレタリアート、農奴、小作農、そしてリソルジメントによる国家統一以前のブルジョワジーといった社会集団をサバルタン諸集団として考察している<sup>17</sup>。

第2草稿及び第5草稿は、それぞれ「方法的諸基準」、「方法論的諸基準」という見出しが付され、サバルタン諸集団の歴史を検討するうえでの留意点や指針が記されている。まず、第2草稿では、サバルタン諸集団の歴史が「必然的に断片的」でしかなく、その歴史研究は「モノグラフ」の収集と分析に頼らざるをえないことが指摘されている<sup>18</sup>。グラムシによると、「サバルタン諸集団は、反乱や蜂起の場合においてもなお常に支配的諸集団の主導性のもとにおかれて」おり、「恒久的な」勝利のみが、（中略）その従属性を打破する」。ゆえに、「恒久的な」勝利」を収めてこなかった多くのサバ

11 『獄中ノート』を世に知らしめた「問題別選集」全6巻においては、編者トリアッティの手によって「サバルタン・ノート」の全8草稿がバラバラに解体される形で収録されたため、グラムシのサバルタン論を系統的に読み取ることではできなかった。また、1975年に出版された「校訂版」では、『獄中ノート』の原本が概ね忠実に再現され、サバルタンをテーマとするまとまった草稿としての「サバルタン・ノート」の存在が明らかにされたが、「校訂版」の編者ジェラルターナも「サバルタン・ノート」が含まれている第3期の「フォルミア・ノート」よりも、それ以前に書かれた第2期の「トゥーリ・ノート」を重視する見解を述べており、グラムシの「サバルタン」概念の重要性はほとんど見落とされたままであった。さらに、グラムシの論考における「サバルタン」という言葉が、検閲を免れるための「プロレタリアート」を意味する隠語であるという説（検閲論）が広く流布されてきたことも、グラムシの「サバルタン」概念の矮小化に繋がってきた。詳しくは、松田博「解題1「サバルタン・ノート」と千年王国運動」（アントニオ・グラムシ（松田博訳）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』明石書店、2011年所収）、134-139頁。Marcus E. Green, "Rethinking the Subaltern and the Question of Censorship in Gramsci's Prison Notebooks," *Postcolonial Studies* Vol. 14, No. 4, 2011, pp. 387-388.

12 Ibid, pp. 388-399.

13 松田博「解題2「サバルタン」論の生成と展開」（アントニオ・グラムシ（松田博訳）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』明石書店、2011年所収）、164-165頁。

14 ボローニャにおける市民の自治を容認する特許状の発布（1116年）や、フィレンツェにおける市民による「自由都市」宣言（1115年）など、中世において市民層による自治権の強化が進められた。

15 リソルジメントは、「再興」を意味し、19世紀前半から1861年のイタリア王国誕生までの「国家統一運動」を指す。

16 Marcus E. Green, op. cit., p. 394.

17 アントニオ・グラムシ（松田博訳）『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』明石書店、2011年。

18 同上、31-32頁。

ルタン諸集団は、その「統一にむけての傾向」をいわゆる正史に残すことがない。したがって、サバルタン諸集団の歴史を分析するには、「断片的」で「エピソード的」な「モノグラフ」の研究に依らざるをえないのである。実際、グラムシは、獄中であって資料収集に際して極めて制限された環境のなかで、第1・4・6草稿でサバルタン諸集団の歴史を「モノグラフ」から描きだそうと試みている<sup>19</sup>。また、第7草稿では、「哲学的小説」が「たとえ他の関心事に頭脳が支配されている知識人を通して」であり、最も底辺の集団も含むサバルタン集団の基本的で根源的な渴望を無意識に反映している」とし、歴史資料として分析対象とされるべきことが論じられている<sup>20</sup>。

さらに、第5草稿においてグラムシは、サバルタン諸集団の断片的な歴史的諸局面を具体的に6つの研究課題として示し、それらを集約的に研究する必要性を主張している<sup>21</sup>。こうした研究の題材の一例としてリソルジメント時代における革新的諸勢力の運動を挙げたグラムシは、次のように述べている<sup>22</sup>。

国家となるためには、ある勢力を従属させ、またある勢力を排除しなければならなかったし、他の勢力からの積極的あるいは消極的な合意を得なければならなかったのである。この（リソルジメントを指導した——引用者）革新的諸勢力の、サバルタン諸集団から指導的かつ支配的諸集団への発展の研究のためには、打倒すべき敵に対して自律性（*autonomia*）を獲得し、積極的あるいは消極的な支援を得た諸集団を融合する諸局面を研究し、解明しなければならない。

ここで注目すべきは、グラムシによるサバルタン諸集団の断片的な歴史的諸局面の研究が、「サバルタン諸集団から指導的かつ支配的諸集団への発展の研究」を目的としている点である。グラムシは、正史から排除されたサバルタン諸集団の歴史に焦点を当て「サバルタン・ノート」を著したが、この歴史研究の根底には、サバルタン諸集団がいかにしてその従属的な立場を脱し支配的諸集団へと発展できるかという運動論的な関心があったことがわかる。グリーンは、グラムシのサバルタン論が「変革的实践」上のものであるとして、次のように述べている<sup>23</sup>。

グラムシは、従属性を克服しサバルタンとして存在することをやめるための革命的变化とサバルタン諸集団のエンパワーメントに関心を寄せていた。（中略）このプロジェクトは、単に既存の構造におけるサバルタンを認識するということだけに関わるものではなく、従属的位置からヘゲモニー的位置へのサバルタンの変位（*transformation*）と関係するものである。

19 前掲「解題2「サバルタン」論の生成と展開」157頁。

20 前掲『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』69頁。

21 同上、51-52頁。

22 同上、53頁。

23 Marcus E. Green, *op. cit.*, p. 400.

グラムシは、従属－支配関係のダイナミズムを捉え、サバルタン諸集団を自らの従属的な状況を脱しうる存在として認識している。したがって、前述したとおり、宗教的マイノリティや奴隷などの社会集団をサバルタン諸集団として分析したグラムシであったが、その実体的な存在をサバルタンとして規定したのではなく、あくまでもそうした社会集団が置かれた従属的な状況を「サバルタン」という概念で表現したといえる。

加えて、その従属している状況は、単なる経済的な階級関係においてのみ見いだされるものではないことが指摘できる。リソルジメントによる国家統一以前のブルジョワジーまでをもサバルタン集団とするグラムシは、必ずしも経済的な差異だけに着目しているわけではない。グラムシがサバルタンとして考察した社会集団をみると、人種的、文化的、あるいは宗教的な下位性といった社会的な関係上の差異にも関心が寄せられている<sup>24</sup>。そして、サバルタン諸集団の「歴史的統一は、国家において実現され」と述べるグラムシは、従属的な立場にあるサバルタン諸集団がいかにして組織化を進め「国家」として統一を果たすかという関心のもとで歴史研究を行っており、「サバルタン」概念が政治的なもの——国家（支配）と非国家（被支配・従属）という政治構造のなかで見いだされるもの——であることも指摘できる<sup>25</sup>。

サバルタン諸集団の歴史を分析しようと試みるグラムシのサバルタン研究は、「現実の歴史過程からの（サバルタン諸集団の——引用者）排除・周辺化」だけでなく、「歴史像・歴史叙述（中略）からの排除・周辺化」も示すものであることが指摘されるが<sup>26</sup>、グラムシの関心の核心部は、歴史記述の権力性——すなわちエリートによる歴史記述からのサバルタン諸集団の排除という権力性——に対する批判よりも、歴史記述から排除されたサバルタン諸集団の歴史を復元することで人々の「従属的位置からヘゲモニー的位置」への「変位」を実現する方法を探る「変革的实践」上の分析に向けられたものであったと考えられる<sup>27</sup>。

この運動論的な関心を根底とするグラムシのサバルタン研究を着火点としつつ、南アジア近代史研究において歴史記述の権力性に対する批判的言説分析としてのサバルタン研究が展開された。次章では、グハのサバルタン研究において醸成された、歴史記述の権力性という言説領域における従属－支配関係をも指し示す概念としての「サバルタン」に焦点を当てる。

24 Ibid. p. 395.

25 前掲『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』51頁。

26 前掲「解題1「サバルタン・ノート」と千年王国運動」143頁。

27 リソルジメント時代の千年王国運動についての考察においてグラムシは、「社会的エリート」がダヴィデ・ラザレッティ（サバルタン集団の指導者）を「野蛮さや病理性」によって特徴づけられる人物として描いてきたことを批判したが、その批判は、そうしたエリートによるサバルタンの描出がイタリア国民の一体的なりソルジメントを妨げ、国民国家としての真の統一を不可能にしたという点に向けられたものであった。前掲『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』16-23頁及び79頁を参照。

## 第2章 グハによる言説領域への展開

1982年、インドの歴史学者ラナジット・グハ<sup>28</sup>は、雑誌『サバルタン・スタディーズ』(*Subaltern Studies: Writings on South Asian History and Society*)<sup>29</sup>を創刊した。第1巻の序文でグハは、南アジア近代史研究の手引きとして、前述したグラムシのサバルタン研究における6つの研究課題に言及しており<sup>30</sup>、このプロジェクトを通じて、グラムシが方法論として示したサバルタン諸集団の断片的な歴史的諸局面の研究が南アジア近代史を舞台に実践されたといえる。ただし、グラムシのサバルタン研究が運動論的な関心を核とする歴史研究であったのに対し、グハのサバルタン研究は言説領域の権力構造に関心を寄せる歴史記述研究という側面を持つものであることが指摘できる。そして、このグハによる歴史記述研究は、批判的言説分析——歴史記述を批判的に分析することで権力と密接に結びついた言説性を明らかにする——という手法を特徴としている<sup>31</sup>。以下では、グハのサバルタン研究に着目し、言説領域へと展開された「サバルタン」概念について検討する。

『サバルタン・スタディーズ』は、南アジア近代史がエリートの立場から構築されてきたことを批判し、支配的なエリート主義的歴史記述に対抗するサバルタンの歴史を新しく描こうとするプロジェクトであった<sup>32</sup>。従来の南アジア近代史を構築してきたのは、「植民地主義的エリート主義とブルジョワ民族主義的エリート主義」という二つのエリート主義であり<sup>33</sup>、前者はイギリスによる植民地インドの支配を正当化する歴史言説を構築し、後者はイギリスによる支配に対抗するかたちでインドの民族主義者の支配権力とアイデンティティを主張する歴史言説を構築してきた<sup>34</sup>。

グハは、この二つのエリート主義的歴史記述を批判的に分析することによって、両者が対立関係にあると同時に、自由主義のイデオロギーを共通の土壌とすることを指摘している<sup>35</sup>。それによると、植民地主義的エリートは、「自由主義のイデオロギーと諸制度を植民地インドにもたらすことによって、民族主義的エリートに権力を与えるとともにそれを保持させる機能を果たし」、一方の民族主義的エリートは、「自由主義のイデオロギーを受容し、植民地主義が築いた政治制度の内部で権力を確立しながら」、同時に「民族主義のイデオロギーによって土着の半封建的な権力も保った」<sup>36</sup>。

28 グハは、1923年に現在のバングラデシュに位置するベイカーガンジ(Bakarganj)地区のシダーカティ(Siddhakati)村に生まれた。カルカッタ大学で修士号(歴史学)を取得した後は、インド共産党の日刊紙のスタッフとして勤務し、党の代表としてパリの世界民主青年連盟の事務局に派遣された。しかし、ソ連によるハンガリー侵攻に反対しインド共産党を離党。その後、イギリス、インド、そしてオーストラリアへと拠点を移しながら研究を続け、『サバルタン・スタディーズ』の創刊に至る。詳しくは、Partha Chatterjee, "Editor's Introduction," in Partha Chatterjee ed., *The Small Voice of History* (Ranikhet: Permanent Black, 2018), pp. 2-13.

29 『サバルタン・スタディーズ』は、2008年のプロジェクト解散へと至るまでに12巻刊行された。

30 Ranajit Guha, "Preface," in Ranajit Guha ed., *Subaltern Studies I: Writings on South Asian History and Society* (Delhi: Oxford University Press, 1994a), p. vii. 以下、SSと略し、ローマ数字は巻数を示す。

31 拙稿「ラナジット・グハと「サバルタン」——サバルタン研究の方法論に関する一考察——」『政治経済学研究論集』第7号、2020年、84頁。

32 Ranajit Guha [1994a], op. cit., p. vii.

33 Id., "On Some Aspects of the Historiography of Colonial India," SS I, 1994b, p. 1.

34 Id., "Dominance Without Hegemony and Its Historiography," SS VI, 1994c, pp. 210-212.

35 Ibid., pp. 213-214.

36 前掲「ラナジット・グハと「サバルタン」——サバルタン研究の方法論に関する一考察——」78頁。

さらにグハは、二つのエリート主義がインド・ナショナリズムの形成をエリートによる偉業として捉えていることを批判し<sup>37</sup>、そうした認識に基づく歴史記述は民衆による貢献を理解できていないと論じている<sup>38</sup>。そして、歴史記述とイデオロギーとの関係においては「共犯の機能」がみられるとし、以下のように述べている<sup>39</sup>。

世界を変えること、そしてその状態を維持することは、実際、自由主義的歴史記述が自らの代弁する階級に資するための二重の機能であった。卓越したブルジョワジーの言説は、ブルジョワ階級が優勢の時代に、階級の利益に応じて世界を変えたり、少なくとも大幅に修正したり、さらには支配を固めたり永続させたりするのに手を貸した。このように、この歴史記述は、そのすべての根本的なイデオロギーを共有するだけでなく、積極的に広めたのだとすることができるだろう。この（歴史記述とイデオロギーとの——引用者）共犯の機能は、要するに、自由主義的歴史記述をブルジョワジーの意識それ自体の内部から語らせることだ。

グハは、エリートが自らに都合よく歴史を語ることの利己性を単純に批判したのではなく、そうした歴史の語りとイデオロギーとが密接に結びつきながら相互に強化し合う構造を暴こうとした。つまり、グハの批判の矛先は、エリート主義的歴史記述において「エリート主義的な偏向によって曲解された民衆の意識や政治的行動」が、エリートの「権力を強化するための言説に利用されるだけでなく、そうしたエリートの権力の土台となる支配的なイデオロギーとその言説をも強化することに役立てられて」いるという点に向けられているといえる<sup>40</sup>。

また、1983年刊行の『サバルタン・スタディーズ』第2巻に掲載されたグハの論考「反-暴動の文章」<sup>41</sup>では、より具体的に、植民地インドにおいて頻発していた農民反乱を題材とする従来の歴史記述を分析対象とする研究が展開されている<sup>42</sup>。農民反乱に関する植民地主義的（自由主義的なものを含む）歴史記述と左翼的な歴史記述の双方を批判的に分析したグハが明らかにしたのは、次のことであった。すなわち、従来の農民反乱に関する歴史記述は、反乱の主体である民衆の行動や意識を植民地主義的（自由主義的）あるいは左翼的な“大きな歴史”に当てはまるように曲解し、「反-暴動のコード」という偏った文法に則して記している<sup>43</sup>。そして、そのコードは、植民地の支配や民衆の

37 Ranajit Guha [1994b], op. cit., p. 1.

38 Ibid., p. 3.

39 Ranajit Guha [1994c], op. cit., p. 215.

40 前掲「ラナジット・グハと「サバルタン」——サバルタン研究の方法論に関する一考察——」80頁。

41 「反-暴動の文章」は、ラナジット・グハ、ギャーネンドラ・パーンデー、パルタ・チャタジー、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スビヅァク（竹中千春訳）『サバルタンの歴史 インド史の脱構築』岩波書店、1998年に邦訳が所収されているが、ここでは「反乱鎮圧の文章」という訳があてられている。本稿では、原文の意味合いにより近くなるよう別の訳をあてた。その理由は、グハが必ずしも反乱を鎮圧する側によって書かれた文章だけを取りあげているわけではないことに加え、歴史記述にみられる「反-暴動のコード」(the code of counter-insurgency)という独特の文法が鍵概念として論じられているためである。

42 Ranajit Guha, "The Prose of Counter-Insurgency," *SS II*, 1993, pp. 1-42.

43 Ibid., p. 19.

統治を企図する立場から構築され、したがって権力と密接に結びつくものである<sup>44</sup>。

以上のとおり、グハのサバルタン研究は、批判的言説分析という手法を特徴とし、従来の歴史記述における権力と密接に結びついた言説性を明らかにするものであった。こうした議論において、グハが「サバルタン」という言葉で示したのは、経済的・社会的・政治的な権力関係における従属性だけでなく、言説領域においてエリートの認識や解釈によって支配され客体化される——つまり、サバルタンたらしめられる——インド民衆の従属性であったといえる。この言説領域における従属－支配関係は、グラムシの「サバルタン」概念と同様に、実体的な存在ではなく従属という性質を指し示す概念として「サバルタン」が理解されることによって描出されるものである。

グハは、『サバルタン・スタディーズ』第1巻で、「サバルタン」に関して次の二通りの説明を行っており、グラムシのサバルタン論では定義づけられていなかった「サバルタン」の意味を明確化している。第一の説明は、「南アジアの社会において、階級、カースト、年齢、ジェンダー、職務などによって示される従属の一般的な性質の名称として用いる」というものである<sup>45</sup>。そして第二に、「インドの全人口と「エリート」との人口統計学的な差異」を表し、「民衆」と同義的に用いるという説明である<sup>46</sup>。これらの定義づけから、「サバルタン」は、従属的な個人や集団といった実体ではなく、従属という性質を表す二次的な概念であるとともに、エリートとの差異によって創出される示差的な概念であることが明示されている。

二次的かつ示差的な概念である「サバルタン」は、植民地社会の重層的な権力関係を描出するのに適した概念であったといえる。グハによると、英領インドでは、インドの土着のエリートであってもイギリス人との関係でみれば従属している状況にあるためサバルタンとなりうる。逆に、インドにおける農村の下層地主、貧窮化した大地主、富裕な農民、中流以上の農民はサバルタンに分類されるが、ある特定の状況下においてはエリートのために行動するため、地方レベルではエリートに分類される<sup>47</sup>。つまり、グハは重層的な権力関係におけるエリートの従属性をも示す概念として「サバルタン」を導入したことが指摘できる。

グハによる「サバルタン」の定義及び批判的言説分析による歴史記述研究において描出される「サバルタン」概念を合わせて検討すると、グハは「サバルタン」を「民衆」と同義としたものの、実体的な存在をサバルタンと規定したわけではないと考えられる。反乱や抵抗の瞬間のみならず、それを記録する歴史記述のなかにおいても従属的な立場に置かれる民衆の従属性を指し示す概念として「サバルタン」が用いられ、それにより言説領域における従属－支配関係を視覚化する効果をもたらされたといえる。

44 「反－暴動の文章」において展開されるグハの議論については、前掲「ラナジット・グハと「サバルタン」——サバルタン研究の方法論に関する一考察——」第2章を参照。

45 Ranajit Guha [1994a], op. cit., p. vii.

46 Ranajit Guha [1994b], op. cit., p. 8.

47 Ibid., p. 8.

## 第3章 スピヴァクによる限定

グハをはじめとする『サバルタン・スタディーズ』のプロジェクトに属する研究者たちは、言説領域における従属－支配関係を認識して従来のエリート主義的歴史記述を批判すると同時に、グラムシが指針として示したモノグラフの研究によってサバルタンの歴史を新たに描こうと試みた。そこで、従来の歴史記述では見落とされるか曲解されてきた「サバルタンの意識」や「サバルタンの政治」に関する歴史研究が進められたのだが、この点に関して、文学批評家のガヤトリ・C・スピヴァクが疑義を唱えた<sup>48</sup>。それによると、『サバルタン・スタディーズ』のプロジェクトは、南アジア近代史研究におけるエリート主義的な歴史記述の「認識の失敗」——つまり“民衆”の曲解、民衆を正しく理解していないこと——を明らかにしたが、このエリート主義的歴史記述が失敗するのと同じ理由で、プロジェクトのサバルタン研究自体も——それが「言説の領域における転位をめざした試み」であるが故に——失敗することになる<sup>49</sup>。そして、従来のエリート主義的な歴史記述をサバルタンを主体とする歴史記述へと「翻訳し直す」という『サバルタン・スタディーズ』の試みが、「かなり意識的で介入主義的な戦略」であると評しつつ<sup>50</sup>、スピヴァクは次の点を指摘している<sup>51</sup>。

明らかなのは、<sup>ヘゲモニー</sup>支配の中にサバルタンが絶えず登場する領域とは、常に定義上、歴史の専門家の試みにとっては異質なものであり続けるということである。サバルタンとは、歴史を論理的な物語にしようとするとき必然的に浮かび上がってくる絶対的な限界領域だということを、歴史家は絶えず意識して彼の試みを続けるほかはない。(中略)そして、彼らの研究が「サバルタンの意識」そのものを表すことはない、すなわち、そもそも研究とは事後的な記述なのだから、(サバルタン研究グループもそうであるように、単に学問的な意味ばかりではなく)<sup>ヘゲモニー</sup>政治的な支配に状況的かつ不均等に割り込んでいくサバルタンの実践と、歴史家の研究との間には断絶がある——このように認めることによって初めて、歴史家の研究計画が歴史家本来のものとなるだろう。

以上で述べられているように、サバルタンの実践規範を捉えようとする歴史記述は、現実のサバルタンの実践規範の理論とは断絶している。『サバルタン・スタディーズ』は、グハの批判的言説分析によって、従来の歴史が「認識の失敗」のうえに成立していることを示したが、だからといってサバルタンの歴史を新たに記そうとしても、それが歴史家による「翻訳」である以上、ありのままの事実を写しだすことにはなりえない。このスピヴァクによるサバルタン研究への批判的介入によって、知

48 スピヴァクは、『サバルタン・スタディーズ』第4巻〔1985年刊〕に批評論文を寄稿した。Gayatri Chakravorty Spivak, "Subaltern Studies: Deconstructing Historiography," *SS IV*, 1994, pp. 330-363.

49 ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（竹中千春訳）「サバルタン研究——歴史記述を脱構築する」（ラナジット・グハ、ギャーネンドラ・パーンデー、バルタ・チャタジー、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（竹中千春訳）『サバルタンの歴史—インド史の脱構築』岩波書店、1998年所収）、296頁及び300頁。

50 同上、311頁。

51 同上、312-313頁。

識人によるサバルタンの表象／代表というポストコロニアリズムの中心課題が照らしだされた。

上記の引用のなかでスピヴァクは、「サバルタンとは、歴史を論理的な物語にしようとするとき必然的に浮かび上がってくる絶対的な限界領域」であると述べている。この言説上の「絶対的な限界領域」を示すスピヴァクの「サバルタン」概念については既に多くの研究がなされているが<sup>52</sup>、本章では、スピヴァクが「サバルタン」を実体として把握するのではなく二次的かつ示差的な概念として用いていることに強調点をおいて検討する。

スピヴァクは、「サバルタン」を「社会的可動性の全ての境界線から引き離されていること」(to be removed from all lines of social mobility)と定義している<sup>53</sup>。この定義では、社会階層や経済階級的にエリートに属する人々は重層的な権力関係において従属的な立場にあるとしてもサバルタンではないということになり、グハによる定義と比較すると、「サバルタン」の意味が限定されている。

この「サバルタン」の限定的な定義のもと、スピヴァクは、女性——とりわけ、いわゆる第三世界の女性——こそがサバルタンを構築するコンテクストのなかでサバルタンとしての自らの位置から動くことのできない存在であると論じている<sup>54</sup>。そこでスピヴァクは、サバルタンを描出するうえでの具体的な事例として一人の女性の自殺を取りあげているのだが、この女性は経済階級的にはエリートに属する人物であった。

スピヴァクが取りあげたのは、ブヴァネーシュワリー・バッドリーという人物である<sup>55</sup>。スピヴァクはブヴァネーシュワリーについて、「実際、私は厳密な意味ではサバルタンではない人物を選びました。あの女性は中産階級です。この女性の場合、サバルタンという概念（の純粋性）が汚染されるのだと私は示唆しました」と注意を促している<sup>56</sup>。ブヴァネーシュワリーは、裕福な家庭の出自であるうえに独立運動の主体として武装闘争を行っており、そうした点において「厳密な意味で」サバルタンではない。しかしながら、女性であるために自らの死が誤って解釈される——独立運動の任務に起因する自殺であったにもかかわらず「違法な恋愛の結果」として認識される——ことを恐れた点でサバルタンであった<sup>57</sup>。

ブヴァネーシュワリーは生理を待ってから自殺したのだが、スピヴァクはこれを「サティ（寡婦殉死：ヒンドゥー教徒の寡婦が亡くなった夫を火葬する際に一緒に焼かれて死ぬこと——引用者）による自殺についての社会的テキストの、目立たない、その場かぎりの、サバルタ的な書き直しである」と論じ、以下のように述べている<sup>58</sup>。

52 例えば、上村忠男「戦略としての歴史叙述——歴史のヘテロロジーのために（5）——」『思想』第90号、1999年、55-80頁。本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波新書、2005年、147-181頁（第5章）。

53 Gayatri Chakravorty Spivak, "Scattered Speculations on the Subaltern and the Popular," *Postcolonial Studies* Vol. 8, No. 4, 2005, p. 475.

54 前掲『サバルタンは語るができるか』72-74頁。

55 同上、112-115頁。

56 ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（吉原ゆかり訳）「サバルタン・トーク」『現代思想』第27巻、第8号、1999年、81-82頁。

57 前掲『サバルタンは語るができるか』113-114頁。

58 同上、114-115頁。

ブヴァネーシュワリーは、女性の自殺が認められるのは一人の男性にたいする合法的な恋愛の場合に限られているのを自分の身体についての生理学的な書きこみのなかで(否認するだけでなく)置き換えるための途方もない労をとることによって、法が女性の自殺にかんして認可している動機がどのようなものであるかを一般化してみせたのである。直接的なコンテキストのなかでは、彼女の行為は不条理なものとした。正気によるものではなく錯乱によるものと受けとられるほかなかった。生理を待つという置き換えの所作は、まずもっては、生理中の寡婦には殉死する権利が停止されていたのを裏返したものである。生理中の寡婦は、その疑いをかけられた特権を主張するためには、人前で四日目の沐浴をして生理が終わったことを証明することができるようになるまで待たなければならなかったのだ。

このスピヴァクの記述からわかることは、こうした女性の自殺に対する認識構造においては、女性の自殺は恋愛に起因すると考えられており(ただし容認されるのは「合法的な恋愛の場合」のみである)、生理中の女性の自殺は法的に許されずあってはならないことであるとされ、そしてこの認識構造にそぐわないブヴァネーシュワリーの自殺行為は「錯乱」であると解釈されるということである。この事例にみられるような、「語ろうとする信じがたいほどの努力ですら、言語行為としては実現されない」という認識及び言説構造上の従属性を、スピヴァクはサバルタン性(subalternity)として感得しているのである<sup>59</sup>。

スピヴァクが、「サバルタン」を限定的に定義しているにもかかわらず、ブヴァネーシュワリーのような中産階級の女性をサバルタンとして考察できるのは、スピヴァクにおいても、グラムシやグハと同様に、「サバルタン」が二次的かつ示差的な概念として理解されているためであるといえる。スピヴァクはブヴァネーシュワリーをサバルタンの事例として考察したが、その実体的な存在をサバルタンとして規定したわけではなく、言説構造上の権力関係における従属性を指し示す概念として「サバルタン」を用いていることが指摘できる。哲学の領野からスピヴァクの「サバルタン」概念を検討する論考では、次のように論じられている<sup>60</sup>。

サバルタンの声がサバルタンの他者によって与えられるというのは、つまり、彼・彼女たちは沈黙しているからである。沈黙しているのがサバルタンの規定であるとするなら、語るサバルタンはもはやサバルタンではない。したがって、スピヴァクのサバルタン概念で重要になるのは、その存在をそれが存在している仕方に見えるようにさせるということであって、物理的に声を与えらるということではない。サバルタンは実体ではない。したがって、ある十全な概念としてサバル

59 前掲「サバルタン・トーク」82頁。

60 伊吹克己「スピヴァクとインド——脱構築、サバルタン、サティー」『専修大学人文科学研究所月報』第230巻、2007年、39頁。

タンを考えたときに、それはわれわれの手からこぼれ落ちていってしまう。しかし、サバルタンという言葉が発しなければその存在に人が気づくことはない。すなわち、われわれはサバルタンを「抹消の下に」置いて理解しなければならない。

実体としての「サバルタン」に「物理的に声を与える」ことがスピヴァクの関心であったわけではない。つまり、スピヴァクは、ブヴァネーシュワリーに彼女の自殺の真意を語らせようとしたわけではない。スピヴァクが示そうとしたのは、真意を伝えようとする主体的な表現とそれに対する解釈との間にある隔たりであり、前者の後者に対する認識及び言説構造上の従属性であった。したがって、スピヴァクの「サバルタン」概念は、サバルタンをサバルタンたらしめる構造的な権力性を明らかにする効果を持つものであるといえる。

#### 第4章 今日のサバルタン研究の拡張

『サバルタン・スタディーズ』によるサバルタンの歴史を打ち立てる試みは、様々な批判に晒されながら研究の内容を変質させてきた。スピヴァクの批判的介入によって歴史研究から言説研究へとシフトした側面もあるが、プロジェクトに属する研究者であるバルタ・チャタジーは、サバルタン研究の民族誌学的な視点へのシフトという側面を指摘している<sup>61</sup>。それによると、サバルタン研究は、民衆文化をはじめ、政治的儀礼、宗教、ジェンダー、スポーツ、暴力などへの関心に開かれ、テキストを生産しない人々による実践的な活動の分析に寄与してきた。つまり、従属的な立場にある人々の文化や社会生活を掘り起こす実証的な研究が、サバルタン研究の方法論として展開したといえる。

また、前述したグハによる定義において「南アジアの社会」や「インドの人口」といった言葉で地理的に限定づけられていたサバルタン研究は、スピヴァクからの批判的介入を契機にグローバルで学際的な議場へと変位したことによって——スピヴァクの限定的な定義とは逆に——あらゆる関係性において見いだされる従属性に関する研究として拡張された。そのため、「サバルタン」という言葉は、被抑圧者、被差別者、貧者、女性、マイノリティなど、様々な関係性のなかで下位に置かれる個人や集団を指す便利な用語として汎用されている。

このように拡張された今日のサバルタン研究は、研究者によるサバルタンの規定行為をしばしば伴い、本稿の冒頭で紹介したルーンバの問い——「サバルタンに語らせることは客観的にいって可能なのか？それとも私たち自身の関心事を、サバルタンに腹話術で語らせようとしているだけなのか？」——に付されることになる。そこで、今日のサバルタン研究は、サバルタンの規定行為という研究者の権力性に無自覚なまま何らかの関係性において従属的な立場にある人々をサバルタンとして研究するか、あるいはサバルタンの規定行為を自覚してその乗り越え方を模索する方法論的な検討を行う

61 Partha Chatterjee, "After Subaltern Studies," *Economic & Political Weekly* Vol. 47, No. 35, 2012, p. 49.

か——本稿がまさにこの次元の初歩段階にあたる——のどちらかの視点からなされているといえる<sup>62</sup>。

サバルタン研究におけるサバルタンの規定行為の乗り越え方については、研究者が「自らをサバルタンに変形させるように試みつけ（サバルタンへの——引用者）応答の可能性をさぐること」が重要であると論じられている<sup>63</sup>。「サバルタン」を実体概念ではなく「関係のカテゴリー」として考察する論考では、次のように述べられている<sup>64</sup>。

エリートによる《サバルタン研究》であるかぎり、表象＝代行を完全に回避することは不可能だろう。私が気になるのは、エリートとサバルタンが水も洩らさぬコンパートメントとみなされすぎているのではないかという点である。サバルタンが関係的なカテゴリーなら、私のなかにもエリートの要素とサバルタンの要素がせめぎ合っているはずである。それを手がかりに、肩肘を張らずにサバルタンと交じることができると思う。

二次的かつ示差的な概念として「サバルタン」を理解することによって、前述したグハの説明にあったように、重層的な権力関係におけるエリートの従属性をも「サバルタン」という言葉で示すことが可能となる。つまり、エリートである研究者も何らかの関係性のなかで従属性を持ちえるため、サバルタンとなりうる。上記の議論では、そうした研究者自身のサバルタン性を媒介として、サバルタンへの「応答の可能性」が開かれると考えられている。

しかしながら、こうしたエリートによる自らのサバルタン化は、「サバルタン」の特権化によってスピヴァクのいう言説上の「絶対的な限界領域」に押し込められた人々の声をより一層かき消す危険性を孕んでいることが指摘される。この点に関して、1990年代のアメリカの学問世界における「毛沢東主義」の流行について、レイ・チョウは次のように批判している<sup>65</sup>。

（前略）非西洋文化をオリエンタリストは軽蔑するが、毛沢東主義者はそれとは反対に、「軽蔑された」他者を自分の研究の対象に転化するか、あるいは場合によっては自分自身と同化してしまう。感嘆と道徳心とを混在させて、毛沢東主義者は、すべての非西洋文化をおしなべて「サバルタン」に転化し、それから今度はそれを使って同様にあらゆる「西洋」を一様に叩くのである。

62 例えば、井上貴子「サバルタンを表象すること——インドについての映画に描かれた女性と子ども——」『アジア太平洋研究』第35号、2010年、91-102頁。中島岳志「サバルタンの公共性とヒンドゥー・ナショナリズム——スラム街におけるセワー・バーラティの活動をめぐって——」『アジア・アフリカ地域研究』第3号、2003年、186-223頁。新村恵美「インドの家事労働者の回顧録に関する一考察——G. C. スピヴァクとサバルタン・スタディーズの言説を使って——」『目白大学人文学研究』第11号、2015年、137-151頁。

63 崎山政毅「文体に抗する「文体」——サバルタン研究の批判的再考のための覚書——」『思想』第866号、1996年、169頁。

64 白田雅之「サバルタンとは誰か——関係のカテゴリーを目指して——」『創文』第388号、1997年、9頁。

65 レイ・チョウ（本橋哲也訳）『ディアスポラの知識人』青土社、1998年、28頁。

西洋と非西洋という権力関係において西洋側に属するアメリカの研究者が、西洋批判を展開するにあたり自己をサバルタンと同化することでその批判に正当性を持たせようとするのだが、結果的にそれは、自らの——つまり西洋側の——言説によって非西洋を支配する行為にほかならない。チョウによる批判は以下のように続く<sup>66</sup>。

アメリカでは大学の研究者は男も女も、仕事の上で不満や争いがあると、自分たちが「強姦」されたという言い方をしょっちゅうする。(中略) こうした自己劇化の根元にはすべて自分をサバルタン化する動機がひそんでいる。権威と力を得るのに、それがますます確実な方法となりつつあるからだ。こうした知識人の行いは圧制を語る用語から批判的かつ反体制的な重要性をはぎとり、その結果抑圧された人々から、抗議と正当な要求の言葉を奪うことにほかならない。被抑圧者の声を私たちはめったに聞くことができないが、彼ら彼女らは二度剥奪されるのだ——一度目は経済的な機会を奪われ、二度目は自分たちの言語を奪われることによって。その言語は良心を「かきたてられた」私たちが話す言葉ともはや見分けがつかないからである。

グラムシによる運動論的な関心から導入された「サバルタン」は、従属的な立場に置かれた人々の従属的な位置からの変位に関わる概念であったはずだが、今日においては「サバルタン」が西洋の学問世界において特権化されることでそうした変位がむしろ妨げられているといえる。

こうした批判は極めて重要であるが、本稿の論点的を絞ると、今日的なサバルタン研究の拡張も、エリートである研究者による自己のサバルタン化とそれに伴う「サバルタン」の特権化も、どちらも「サバルタン」があくまでも二次的かつ示差的な概念であるが故に生じる現象であると考えられる。サバルタンと非サバルタンとの境界線は、経済的、社会的、政治的な関係性のいずれにおいても、さらには言説領域での関係性においても引くことができる。また、それは重層的な権力関係のうちどの層の間にも引くことができる。したがって、その線引きはサバルタン研究の研究者による権力関係の認識の仕方に左右され、被抑圧者、被差別者、貧者、女性、マイノリティ、そしてエリート及び研究者自身までもがサバルタンとして論じられうるのである。

### おわりに——「サバルタン」概念の特性と意義

グラムシから今日のサバルタン研究に至るまで、その時代的、地理的、方法論的な変化にもかかわらず、「サバルタン」の概念的な特性は二次的かつ示差的なものとして通底している。改めて整理すると、二次的というのは、実体ではなく従属という性質を表すということであり、示差的というのは、何らかの関係性のなかで差異によって現されるということである。グラムシ、グハ、そしてスピヴァ

66 同上、29頁。

クの三者はいずれも、実体的な存在をサバルタンとして規定したわけではなく、人々が従属的な立場に置かれている状況やその従属性を指し示す概念として「サバルタン」を用いていた。また、研究者によるサバルタンの規定行為は、実体的な存在をサバルタンとして規定するものであるが、そうした規定自体、「サバルタン」が二次的かつ示差的な概念であるが故に可能となる行為であるといえる。さらに、エリートである研究者による自己のサバルタン化もまた、こうした「サバルタン」概念の特性に基づくものである。

実体ではなく性質を示し、関係性の中で示差的に創出される概念である「サバルタン」の内実、社会のなかのどの関係性を切り取り、そのうちのどちらを従属的であるとみなすかによって多様なかたちをとる。この内実の可変性は、研究者によるサバルタンの規定行為という危険性を伴うが、一方で、権力構造において人々がサバルタンたらしめられるシステムを可視化するという意義をもたらすものであるといえる。

グラムシによるサバルタン諸集団の歴史研究も、グハによる農民反乱に関する歴史記述研究も、そしてスピヴァクによる女性の自殺に関する事例研究も、どれをとってもそこで取りあげられている人々は運動・反乱・抵抗といったかたちで主体的に声をあげている。したがって、これらのサバルタン研究は、声をあげられない人々についての研究であったわけではなく、人々の主体的な声が従属的な位置に置かれることではいかにかサバルタンたらしめられるかについての研究であったことが指摘できる。グラムシにおいては、現実のヘゲモニー闘争のなかで、社会経済的に下位に位置する人々の政治的行動が支配的諸集団によって周辺化される政治構造上の従属性が示されていた。また、グハにおいては、歴史記述のなかで、民衆の政治的行動や表現が曲解されエリートの言説や支配的イデオロギーの強化に利用されるという歴史言説構造上の従属性が問題化された。そして、スピヴァクにおいては、女性を従属的な位置に置く認識及び言説構造において、女性の主体的な表現が解釈されることによって、女性がより一層従属的な位置に閉じ込められてしまうという問題が示された。

内実が可変的である「サバルタン」は、以上のような構造上の従属性をも指し示すことができる概念であり、主体的な行動者・表現者である人々を従属的な位置に置く政治構造や言説構造において作用している権力性を明らかにするという意義を持つものであるといえる。したがって、研究者によるサバルタンの規定行為を避けながら、人々がサバルタンたらしめられる構造上の問題を論じることは可能であり、またそうした議論において「サバルタン」概念の意義がもたらされると考えられるのである。

[謝辞] 本稿は、日本政治学会 2020 年度研究大会での報告論文の一部を加筆修正したものである。司会と討論者を兼務し鋭いご指摘をくださった五野井郁夫先生、討論者として貴重なコメントをくださった川出良枝先生、ならびに質問をくださった分科会の参加者に感謝申し上げる。なお、本稿は JSPS 科研費 JP19J14229 の助成を受けたものである。